

伝える力

チェコ少女合唱団「イトロ」の東京公演から

増田 一世

本誌今号の「街角から」で作曲家の中村雪武さんが紹介されているチェコ少女合唱団「イトロ」の東京公演に出かけた。もちろん中村さんにご紹介いただいたからだ。夫と友人と3人で東京芸術劇場に並んだ。サラリーマン人生の長い夫は、ゴルフやサッカーは大好きだが、クラシックの音楽にはあまりなじみがない。途中で居眠りでもするのではとちょっと心配しながら出かけたものの、その心配は杞憂に終わった。

白いブラウスと赤いベストとスカートという衣装で30人あまりのチェコの少女たちが舞台上に登場し、イジー=スコバル氏の指揮で歌い始めた。その最初から、舞台に惹きつけられていった。「イトロ」の少女たちは、約500名の生徒の中から選抜された35名のプロフェッショナルだそうだ。プロとして磨かれる過程の中には、単に技術の習得ではなく、人間としての成長や発展があるのだろうと実感した。1人1人が自由に自分を表現しているように感じたし、なおかつ合唱団としてのまとまりがあるのだ。これは当たり前のことなのかもしれないけれど、門外漢の私にとっては、とても新鮮だった。

夫は、チェコの少女たちが日本に来て、私たちの前で歌っていること、それを聴いている自分たちのことを考え、「平和の大切さ」を感じたと言う。最近の私たちには、マスコミ等を通じて戦争が身近なものとして迫ってきている。チェコの人々にとっても、「先の

大戦で『アウシュビッツの控え室』と言われたテレジン収容所でユダヤ人の大虐殺の悲劇を体験し、近年はチェルノブイリ原発事故の甚大な被害を受けた人々にとって、平和の下に暮らすことは切実な願いである」(コンサートパンフレットから)という。

そして、その平和を希求する思いが強く私の心に迫ってきたのは、中村さんが作曲された「虹よ永遠に～真実井房子原爆体験記より～」という歌曲であった。作詞は本誌前号に登場した被爆経験を持つ橋爪文さんだ。メゾソプラノの斎藤陽子さんと「イトロ」の少女たちが歌う。

50年あまりの時を越えて、そして国境や言葉を越えて、チェコの少女たちが受け止めた被爆した人々の現実、思い、願い、子が親を、親が子を求めるその命をかけた叫び……圧倒され、心の深いところを大きく揺すぶられた。

この叫びは、50年前のものではない。今もこの地球のあちこちから聞こえてきているものなのだ。「戦争はあってはならない」「命は大切だ」と誰もが思う。しかし、戦争はなくならない。

真実井さんがなかなか語れなかった被爆体験が、橋爪さん、中村さん、イトロの少女たちの心と体を通して、21世紀を生きる人々に伝えられている。この力を信じたいと思った。